

弁天様

令和2年3月第2週放送

べんてんさま

弁天様の弁天は略した言い方で、弁才天が正確な名前になります。

日本三弁天としてあげられるのが、琵琶湖の竹生島、湘南の江ノ島、広島県の厳島ですが、すべて水の畔にあります。これは、弁天様が川の女神であることからきていると考えられます。

弁天様は、もとはインドの「サラスヴァティー」という河の神です。河の流れの美しさ、水音のやさしさ、河から受ける恵みなどから、「サラスヴァティー河」を神格化したのでしょう。そこへ「ヴァーチュ」という、学問・知恵の神が水の女神であることから同一視されるようになりました。

河のせせらぎから音楽や巧みな言葉遣い、河の恵みである豊かな実りと幸福、水の強い力は戦闘力、加えて「ヴァーチュ」の学問・知恵といった多くのものを司る性格を持つようになったのでしょう。これらの性格から、弁才天の「才」の字は、「才能」の「才」を用います。

インドの神であった弁才天、弁天様はやがて仏教に取り入れられ、教えを護る神となります。

その姿として、腕が二本や八本のものがあります。二本の腕で、ヴィーナーというインドの代表的な弦楽器を持っていますが、これは、琵琶をもった日本の弁天様に通じます。

八本の姿は密教の経典に描かれた姿で、インドではほとんど見られない形ですが、日本には多くあります。

日本に弁才天が入ってきたのは、奈良時代前の仏教伝来と同時だったようですが、そこで日本の穀物の神である宇賀神という神と一緒に、宇賀弁才天となりました。八本の腕を持つ姿で、持ち物は、願いを叶える珠、剣や矛などで、仏教を護る神としての面を強調しています。琵琶は持っていません。頭の上には、鳥居が据えられ、とぐろを巻いた白蛇の上に、白

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

いひげをたくわえた宇賀神の顔があります。両者が混じり合った姿です。

穀物の神であった宇賀神と一緒にすることで、豊かな実りと幸福をもたらす面が強くなり、水辺以外の場所にもまつられていったと考えられます。

このように、たくさんの力を持つ弁才天つまり弁天様は多くの人々の信仰を集め、やがて室町末期に成立し、江戸時代に定着する七福神のひとつに名を連ねます。七福神においては、弁才の「才」は、豊かさを強調する「財産」の「財」を用いるようになりました。

今日も、各地の弁天様を、多くの人が詣^{もう}でているのではないのでしょうか。

— 終 —